

待兼山俳句会

第六百八十六回

世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡翠・根来眞知子

東中

乱・向井邦夫・森茉衣

令和六年四月十五日（月）

会場

大阪俱楽部

会議室

締切

午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡翠・東中乱

向井邦夫・森茉衣・山田安廣

投句者

植田真理・碓井遊子・鶴岡言成・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・根来眞知子

平井瑛三

出席者十一名十投句者八名 計十九名

兼題

花曇・蛇（幹三）春の海・雪柳（暁子）

当季雜詠 通じて八句

次回

例会 令和六年五月二十日（第三月曜日）会場

大阪俱楽部

会議室

締切

午後二時

兼題

初夏・姫女苑（姫女苑も可）（幹三）

草笛・若楓（暁子）

その他当季雜詠

選者吟

蛇よ蛇それは私の耳の穴

幹三

笑ひ出す少女揺れ出す雪柳

人間の暮らす隙間に雀の巣

蛇の来て即興曲を聞かせ去る

暁子

花曇朝より決心つかぬこと

一枚の布となりたる春の海

唸りたる虻を探せり昼の園
○瀬戸内に大橋いくつ花曇
雪柳眩暈のごとく風に揺れ
○花曇はがき一枚書き損ず
雪柳娘らの指語りだす

○近づきて離れて虻のひと日かな
花曇炊飯器よりヨーグルト
忘れ物して戻る道花曇

一人居の散らかし放題花曇
トンネルの途切るるたびの春の海
花曇ビルの谷間の小さき墓地
青き目の虻が天下を睨みをり
花曇朝より決心つかぬこと
雪柳大きく揺れて白龍に
愛犬を見送りし日や花曇
ポケットに薄き貝殻春の海
逝きし友の声を聞きたり花降る日
○船長の声やはらかき春の海
この街の何處に生まれ虻来る

邦夫瑛三真理輝子暎子暎子翠和江遊子暎子暎子安廣亂和江暎子暎子輝子安廣惠子堯子

幹三特選句講評

瀬戸内に大橋いくつ花曇

春の海遊び呆けし夫よ娘よ 宵の空どこか明るき花曇り 眠りたる床屋の猫や花曇 虹一つ花を散らせて飛び去りぬ 空と海きは茫洋と花曇	安廣 邦夫 言成 乱
◎花曇眉間の皺を伸ばさねば 一枚の布となりたる春の海	輝子
◎払へども妻を離れぬ虹にくし 門入れば雪崩のごとく雪柳	暁子 暁三
氣だるさや虹の羽音を遠く聞き ◎牛の尾の虹去りてなほ払ひをり 船一艘港離れし春の海	暁子 暁三 瑛三 眞知子 言成
瀬戸内に大橋いくつ花曇	瑛三
瀬戸内の島々を花曇の上空から見て いる 気分になりま した。今様の鳥瞰図的錦絵です。明るく曇つた春の空、季 語にあるスケール感が生かされています。	翠 安廣 邦夫 言成 乱

・花曇はがき一枚書き損ず

輝子

半晴半陰のうす曇り。情緒のある中、どこか春愁と感じるものを感じます。便りを書いていての小さな失敗、この季語と響き合ういい取り合わせです。

・近づきて離れて虻のひと日かな

暁子

虻の一日がどうなっているのか、その考えが面白い。確かに人間の目から見るとこの句の通り。ひねもす飛翔する虻である。

・花曇眉間の皺を伸ばさねば

輝子

春も深まり陽気もよくなってきたのに、なぜか気分が塞ぎ、険しい顔になっていた：いかんいかん。自分への忠告にになっているところが新鮮な句。

・払へども妻を離れぬ虻にくし

瑛三

二人で出かけた春の明るい日。虻の生態を述べながら「愛情表現」になつてゐるではないですか。すてきなご夫婦です。

・牛の尾の虻去りてなほ払ひをり

真知子

牛が放たれている春の野つ原。この気持ちのいい状況で、牛の尻をじつと見ていたというのが牧歌的でありました俳句的。おおらかな気分をいただきました。

・船長の声やはらかき春の海

恵子

船の運航を司る責任ある厳しい職務である。しかし、この日はその声が柔らかく、優しく聞こえたというのである。たぽんたぽんと舷を打つ波の音が聞こえています。

暁子 選

現在地分からぬ地図や花曇
小振りなれど庭を席捲雪柳
払へども妻を離れぬ虻にくし
笑ひ出す少女揺れ出す雪柳
◎雲海に浮かぶ阿蘇路の涅槃像
新幹線江戸まで繋ぐ桜花
フロリダのたゆたふ波や春の海
◎万の花溶かし込みたり花曇
立ち読みの新聞のぞく雪柳
花曇三味の音漏るる祇園かな
ゆつたりと鰯が過ぎゆく春の海
◎のつぺりと一枚となる春の海
密やかに黒猫隠る雪柳
春の海見慣れぬ国旗揚げた船
春の海離島に新任教師来ぬ
てふてふを窓から顔を出して待つ
◎被災者の今日も見詰むる春の海
大所帶樂しかりけり目刺の膳
トンネルの途切るるたびの春の海

遊子	遊子	邦夫	幹三
瑛三	瑛三	和江	幹三
翠	兵十郎	乱	幹三
朱美	茉衣	盛雄	邦夫
幹三	兵十郎	幹三	幹三
和江	乱	和江	幹三
輝子	兵十郎	幹三	幹三
盛雄	兵十郎	和江	邦夫
幹三	兵十郎	幹三	幹三

暁子 特選句講評

・雲海に浮かぶ阿蘇路の涅槃像
　陰曆二月十五日は釋迦入滅の日で、各寺院では寢釋迦
　を描いた涅槃図を掲げる。季題は「涅槃像」。阿蘇五岳の
　連なる様子は涅槃図のお釈迦様が仰向けに寝ておられる
　姿に似ていることから「阿蘇の涅槃像」と呼ばれている。
　雲海ができるのは空気の澄む秋頃かと思うが、三月にも
　雲海の生じることがあるのだろう。地元にお住まいの作
　者でないとなかなか見られぬ雄大で、しかも心安らぐ風
　景。

眠りたる床屋の猫や花曇
石垣の上は天守や雪柳

邦夫
兵十郎

桃源郷花粉にまみれ虻太る

乱
和江

雪柳大きく揺れて白龍に

幹三
幹三

虻よ虻それは私の耳の穴

幹三
幹三

船長の声やはらかき春の海

幹三
幹三

虻大にまみれ虻太る

邦夫
邦夫

虻よ虻それは私の耳の穴

幹三
幹三

虻よ虻それは私の耳の穴

邦夫
邦夫

虻よ虻それは私の耳の穴

幹三
幹三

・万の花溶かし込みたり花曇

兵十郎

互選三句

朱美選

花曇は桜の咲く頃によくある、どんよりとした曇りの
お天気をいう。作者は万の花、つまり無数の桜の花びら
が空中に流れ、それを大気が溶かしてぼんやりとした感
じを醸し出しているのだという。美しい句である。この
季節には桜以外にも色々な花が咲くが、もし赤白黄色の
花々が大気に溶け込んだとすると…サイケデリック！

のつぺりと一枚となる春の海

幹三

私も同じような句を作った。発想が似た句は類想句と
いって余りよくないのだが、波穏やかで、静かな春の海
はこういう感じですよね。

被災者の今日も見詰むる春の海

瑛三

災害や事故の句は体験者でなければ詠まない方がよい
と言われている。実際そうであろう。しかし被災された
方を思う気持ちは詠まれて当然であろう。いわゆる時事
俳句であるが、やはりこういう句は記録として残さなけ
ればならないと思う。海を見つめておられる方々のお氣
持ちは如何ばかりであろうか。あの東日本大震災でも、
海を憎んだり恨んだりする方は少ないと聞いているが、
そうあってほしい。

瑛三選

花曇お薄も菓子も薄みどり
密やかに黒猫隠る雪柳
春の海離島に新任教師来ぬ
何やら物語が始まりそうな気配。

和江選

眞知子
和江
盛雄

花曇朝より決心つかぬこと
牛の尾の虻去りてなほ払ひをり

眞知子
和江
盛雄

樹齢聞き又仰ぎ見る花曇

眞知子
和江
盛雄

桜の古木が大きく広がつてゐる様子を思いました。

邦夫選

眞知子
和江
盛雄

トンネルの途切るるたびの春の海

遊子
茉衣
暁子

鉄筋の壁に寄り添ふ雪柳

遊子
茉衣
暁子

花曇朝より決心つかぬこと

遊子
茉衣
暁子

心が晴れぬ花曇。「朝より決心つかぬ」は言い得て妙。

春の海大軽やかに走りゆく
牛の尾の虻去りてなほ払ひをり

眞知子
和江
盛雄

雲海に浮かぶ阿蘇路の涅槃像
スケールが大きい、私の心まで広くなりました。

眞知子
和江
盛雄

恵子 選

虹の来て即興曲を聞かせ去る

崩れたる家に寄り添ふ雪柳

雪柳大きく揺れて白龍に

揺れる雪柳を白龍とされたのが素晴らしいです。

暁子

安廣

和江

兵十郎 選

虹忙しブルーベリーの花咲けば

殉教の島ゆく旅の花曇

船長の声やはらかき春の海

春の海を行けば船長の声も柔らかくなる。情景が浮ぶ。

輝子

盛雄

恵子

言成 選

孫も子も家中が沸く虹一つ

モノトーンの遠山低し花曇

花曇お薄も菓子も薄みどり

野点の風景がよく詠まれています。

恵子

安廣

眞知子

茉衣 選

殉教の島ゆく旅の花曇

愛犬を見送りし日や花曇

ポケットに薄き貝殻春の海

海浜を歩くと様々な貝殻に出会い、薄く透明なのは拾う。

輝子

盛雄

恵子

堯子 選

一枚の布となりたる春の海

新幹線江戸まで繋ぐ桜花

トンネルの途切るたびの春の海

暁子 亂遊子

雪柳白き重さにゆれてをり
花曇朝より決心つかぬこと
氣だるさや虹の羽音を遠く聞き

言葉で批評しがたいけれど共感できる三句です。

暁子

乱

遊子

眞知子 選

雪柳白き重さにゆれてをり

花曇朝より決心つかぬこと

氣だるさや虹の羽音を遠く聞き

暁子 幹三

暁子

輝子 選

トンネルの途切るたびの春の海

眠りたる床屋の猫や花曇

現在地分からぬ地図や花曇

あいまいな地図しかない。まあいか。花曇の一日。

遊子

邦夫

幹三

真理 選

朝刊に花びら二つ雪柳
ポケットに薄き貝殻春の海

牛の尾の払ひをかはす虹三つ

翠輝子
邦夫

翠選

屏隙間目礼交はす雪柳

鳴く声を探す大樹や花曇

トンネルの途切るるたびの春の海

私も経験したことのある楽しい春の旅。

恵子 遊子

盛雄選

介護へと通ふ道の辺雪柳

出番待つもやひ舟ゆれ花曇

花曇ビルの谷間の小さき墓地

眞知子 真知子

安廣選

花曇朝より決心つかぬこと

のつぱりと一枚となる春の海

トンネルの途切るるたびの春の海

眞知子 真知子

遊子選

瀬戸内に大橋いくつ花曇

春の海靄を突き抜く大機影

春の海離島に新任教師来ぬ

眞知子 兵十郎 盛雄

若い先生が船路で着任。島民の歓迎が聞こえてきそう。

乱選

笑ひ出す少女揺れ出す雪柳

待つ人は未だ來たらず花曇

花曇お薄も菓子も薄みどり

花曇を同じく曖昧で薄色のお薄と菓子に結び付けた。

幹三

恵子

眞知子

即吟
卓上の蘭の花（えびね・アジュガ）を詠む

曇り日の卓上海老根蘭昏し

黄海老根とあじゅがのつくる佳き眺め
お披露目の海老根の香りはなんなりと

木々の蔭茎伸びて花海老根かな

花えびね神の細工の細やかに

波打ちし葉がくれに立ち海老根の黃

地上種は慎しきかな海老根蘭

句会果て夕日の色の海老根かな

紫のアジュガ夫人と春句会

それぞれが物言ふ如く海老根咲く

憂ひしままに貴ひし海老根枯らしけり

幹三 茉衣 兵十郎 翠 安廣 亂

参加者自選句

ひとこと

山田安廣

山戸暁子さんのお句「板張りの廊下を下駄で昭和の日」が第十七回虚子生誕記念俳句祭で「審査員奨励賞」を受賞されました。おめでとうございました。

猫の背に花びら落ちぬ花曇
被災者の今日も見詰むる春の海
忘れ物して戻る道花曇り
花曇椅子に肘置き空ろなる

朱美 瑛三 和江 邦夫

晴の国右舷に望む春の海
船一艘港離れし春の海

恵子 言成 堯子

花開き花落ちて時移り行く

輝子

虹忙しブルーベリーの花咲けば

兵十郎

築山の峯々の白さや雪柳

葉衣

災害の瓦礫を洗ふ春の海

眞知子

花曇お薄も菓子も薄みどり

散る桜鮮やかなりし友の顔

朝刊に花びら二つ雪柳

翠

羽音一瞬耳元虹に乗つ取られ

真理

逝きし友の声を聞きたり花降る日

盛雄

雪柳故郷は遠くなりにけり

安廣

新幹線江戸まで繋ぐ桜花

遊子

さて、世話役では合同句集第五集の編集の準備に掛かって居ります。皆様方には二〇二〇年一月から本年十二月末日までに待兼山俳句会に出句された作品の中から、お一人三十句の提出をお願いする予定をしております。今からそろそろご準備の程お願いしておきます。

お一人の負担金は二万円で十冊を無償提供、追加は

一冊五〇〇円でお願いする事になりますのでお含み下さい。